

一般社団法人 日本ペインクリニック学会 第7回 中国・四国支部学術集会

会長挨拶

一般社団法人日本ペインクリニック学会
第7回中国・四国支部学術集会
会長 荻野 祐一
香川大学医学部麻酔科学講座 教授

2027年2月6日(土)にサンポートホール高松におきまして、日本ペインクリニック学会第7回中国・四国支部学術集会を開催させていただくことになりました荻野祐一 (OGINO Yuichi) と申します。

今回のテーマは「痛みの巡礼 一心と身体がつながる旅」といたしました。

四国に今でもある巡礼という風習と痛みを学ぶ旅という意味を込めて、このテーマとしました。旅をテーマとしたのは、ペインクリニック診療で多くの患者さんの診療をしていて、普段は四六時中痛がってろくに眠れていない患者さんが「今度、旅行に行くんですよ」と、旅の予定を話すときだけは嬉しそうにお話しになる患者さんに複数回出会った経験からです。医師としては、こんなに痛くて本当に旅に行けるのかなと不思議にも感じるので、どの患者さんも旅の報告は楽しそうに話してくれます。考えてみれば、慢性痛の患者さんは、痛みに注意が占拠され、身体の内側から湧き上がる感覚—いわゆる内受容感覚—が鈍り、心と身体の間をつながりを見失っていることが少なくありません。旅は、新しい風景や人との出会いを通じて、その閉じた回路を外側に開き、自分の心と身体が確かに繋がっているという感覚を呼び覚ますのではないのでしょうか。

そんな旅の効能とペインクリニックの役割は似ていると思っています。近年の脳科学研究は、慢性痛の患者さんの脳の中で何が起きているかを少しずつ明らかにしてきました。痛みが長く続くと、脳の中で痛みの信号が自己認識のネットワークと異常に結びつき、「痛いのが私」—痛みがその人のアイデンティティそのものになってしまう。さらに、本来備わっている痛みを和らげるブレーキ、すなわち下行性疼痛抑制系の働きも弱まり、痛みの悪循環に陥ります。ペインクリニックの本質は、この悪循環を断ち、心と身体の間をつながりを取り戻す手助けをすることです。区域麻酔や薬物療法だけでなく、心理社会的なアプローチを含めて、「痛い自分」から「本来の自分」を解放していく—それは、巡礼の旅人が一步一步を重ねて自分を取り戻していくプロセスと重なるものがあると感じます。

本学術集会では、こうした「旅」と「自分を取り戻すプロセス」に焦点を当て、病態メカニズムから日常臨床の工夫まで、多彩なコンテンツを企画しております。ぜひ高松へ「旅」をしにきてください。会場のサンポートホールから目の前に広がるのは瀬戸内海の多島美です。外洋とは違う穏やかな波、点在する島々、そしてそこに差す朝焼けや夕景の柔らかな光—この内海の静かな景観そのものが、心と身体をつなぎ直します。

巡礼の先に、痛みの理解という新しい景色が広がるはずです。